

図書館設立過程と地域社会

— 信濃図書館を例として —

嶋崎 さや香

1. はじめに

かつてウェイン・A. ウィーガン드는、アメリカ公立図書館の蔵書内容を検討して、その構成に影響を与えたのは図書館協会などによる「全国的な基準」でなく、各図書館の「利用者の要求、コミュニティの基準」という「地元の諸条件」だったと明らかにした¹。図書館と地域社会との関わりに着目することの重要性を示唆するウィーガンズの指摘は、日本の図書館史研究の参考としうる。このことは本稿で扱う教育会設立の図書館、すなわち教育会図書館の研究にも当てはまる。

教育会について説明すると、それには1883年に東京で結成された大日本教育会と、地域ごとの教育会の2種類があった。前者は「教員を中心に結成された日本最初の全国的教育団体」であり²、「我邦教育ノ普及改良及ビ上進」を目的に結成された³。注目すべきはその活動内容に図書館の運営があったことで、1887年に東京一ツ橋に大日本教育会附属書籍館が設立され、1911年まで運営された。

一方、地方の教育会は地域学事の改良と拡張を目的に結成され、地域の教育行政担当者や教員、名望家により構成された⁴。1890年頃には全国に700団体以上存在し、これら地方教育会も各地域で図書館を開設していた⁵。先に見た大日本教育会附属書籍館が、それらのモデルとされた。

ところで永末十四雄は、「わが国の公共図書館のうち、特定の個人・団体によって設立された私立図書館を除いて、何らかの形で教育会が関わらないものは稀である」と指摘した⁶。さらに石井敦は都道府県立図書館について「教育会の直接的・間接的なバックアップによって設立された」ものが、全体の「約2/3」に該当すると指摘している⁷。かかる指摘から、教育会が明治末の公共図書館だけでなく都道府県立図書館にも種々の影響を与え、近代日本の図書館発展に重要な役割を果たしていたことが分かる。

この教育会図書館についての先行研究は、①図書館史全体の流れに教育会図書館を位置づけたもの(裏田武夫⁸や永末十四雄⁹)、②教育会が図書館設立に関わった事例を紹介したもの(竹林熊彦¹⁰や石井敦¹¹)、③文部省の図書館政策と図書館奨励過程の関わりを明らかにしたもの(奥泉和久¹²)がある。さらに④各教育会図書館の個別的な検討(和泉田正宏¹³や坂本龍三¹⁴)などもある。

②や③の研究は、設立主体である教育会が図書館設立にどう関わったか示すもので、ウィー

ガンドの指摘する「地元の諸条件」を重視するものではない。また④は各館の所蔵資料をもとに、開館過程や運営予算、蔵書冊数やサービス内容等を明らかにするが、それに関わった具体的な人々や地域の動向までを注視するものではない。

すでに述べたように、教育会図書館は近代日本の図書館発展に重要な役割を果たしたが、各地域に存在した教育会図書館の個別的な検討は、まだ十分に尽くされたとは言いがたい¹⁵。図書館やその設立者への言及にとどまらず、地域社会における図書館設立の機運がどう醸成されたか、人々がどうそこに関わったか、また中央や他県との関わりによる郷土意識の形成まで視野に入れた研究が要請される。以下で引用する資料は旧字を新字に改め適宜句読点を補った。

2. 信濃教育会と信濃図書館

本稿では教育会図書館、なかでも信濃教育会が設立した信濃図書館(1907-1929)を取り上げる。については先に信濃教育会について説明する必要があるだろう。地方教育会の一つである信濃教育会は、「我邦教育ノ普及改良及ビ其ノ上進ヲ図ル」ことを目的に1886年に結成された。本部は長野市に置かれ、会員は知事や県学務課職員、県会議員や師範学校関係者の他、県内各地の小学校長、正教員等から構成されていた¹⁶。信濃教育会の結成以前から活動していた郡教育会なども存在したが、徐々に信濃教育会の下部組織へと編成されていった。結成から約20年後の1907年には、県下の全郡市教育会が統合された¹⁷。主な活動は教科書編纂や出版、教員向け講習会の開催、教育行政への働きかけ等である。活動の様子は機関誌『信濃教育会雑誌』(以下、『雑誌』と略す。なお1907年10月以降『信濃教育』へと改称。)に掲載され、会員に周知された。

この信濃教育会が1907年に作ったのが信濃図書館である。『文部省年報』によると、開館年度の蔵書数は17,760冊、利用者数は7,616人とある¹⁸。では、この蔵書数は当時の長野県内の図書館の中でどの程度の規模だったのか。『雑誌』1907年3月の「県下図書館開設状況」には、県内67館の図書館のデータが挙げられている¹⁹。

そのうち最大のものは中野文庫で、蔵書数が6,250冊である。しかし新設された信濃図書館の蔵書数は中野文庫のそれをはるかに凌ぎ、県内最大の図書館として誕生したのだった。信濃図書館は県立長野図書館の設立が決定した1929年に、書籍13,624冊を寄贈し閉館した²⁰。では教育会によって設立された図書館は全国にどの程度存在していたのだろうか。

表1「年次別教育会図書館の設立数」

年次	1885	1886	1887	1888	1889	1890	1891	1892	1893	1894	1895	1896	1897	1898
館数	1	1	3	4	2	1	4	2	1	1	1	1	2	1
年次	1899	1900	1901	1902	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912
館数	2	9	2	7	6	8	5	8	5	4	3	6	8	4

『近代日本公共図書館年表』を参照し作成²¹。

明治期に作られた教育会設立の図書館数をまとめたのが表1である。信濃図書館設立は1907年であり、全国的な教育会図書館設立ブームの中で作られたことが分かる。その意味で同館は教育会図書館の一つの典型と言えるだろう。また蔵書数も、同館が作られた1907年の教育会図

書館の中で3番目と多く、規模の大きなものだった²²。

つまり信濃図書館は設立年を見れば教育会図書館の典型例であり、蔵書数に着目すればその代表例といえるものである。本稿が同館に特に注目するのは上述の理由からである。加えて言えば、同館を考えるうえで活用が期待できる『雑誌』が復刻刊行されていることも、その理由の一つである。

同館に関する個別研究としては、信濃教育会編纂の『信濃教育会五十年史』がある²³。ここでは図書館設立計画やその経緯、図書館開始委員として活躍した人物が紹介される²⁴。さらに大口の寄付者や多量の書籍を寄贈した支援者への言及もある。この『信濃教育会五十年史』を参考に書かれたものに『県立長野図書館十年史』²⁵や『近代日本図書館の歩み 地方篇』²⁶があるが、その記述は元の書籍を超えるものではない。ただし1983年発行の『長野県教育史』²⁷には新たな知見が随所に見られるので本文中でも適宜参照する。

この他に見るべきは永末十四雄『日本公共図書館の形成』であろう²⁸。永末は信濃図書館が「当初の蔵書三万五〇〇〇冊は優に県立図書館に匹敵し、図書館管理法は東都の図書館に学び、館外閲覧・巡回文庫を運用するなど、教育県長野の自負心を発露したものであった」と評した²⁹。教育県の「自負心」と図書館設立の関係を指摘した点で重要だが、資料による論証の余地が残されている。

以上の先行研究で重視されてきたのは教育会や会員の活動、あるいは信濃図書館そのものだった。そのため本稿では、特に「地元の諸条件」から図書館を捉え直すというウィーガンダの研究視点を取り込んで、これまで論じられてこなかった図書館設立の機運がどう醸成されていたかを『雑誌』の検討から明らかにする。次に先行研究でさほど言及されていない資金寄付者と書籍寄贈者について、いかなる地域のどのような人々が関わったか明らかにする。支援者の性質を居住地域や職業から検討することで、ウィーガンダが提示する図書館と「地元の諸条件」の関わり的一端を見ることが可能となるだろう。また永末が簡潔に指摘した図書館設立と「教育県長野の自負心」の関わりについても、踏み込んだ考察が可能となるだろう。

3. 『雑誌』上に見る図書館設立議論の展開

『雑誌』上で初めて図書館に関する記事が登場するのは1887年10月の「図書館設立」である。これ以降、誌上には様々な図書館関連情報が掲載される。例えば県内の郡教育会が図書館を設立したケース、図書館が皇族の来訪を記念し作られた、個人により開かれたケースなどである³⁰。さらに地域に必要な教育施設として図書館が挙げられる場合もある³¹。他県教育会の図書館設立動向や全国の図書館数、図書館規則等も紹介される³²。

これら県内外の図書館動向を伝える記事の役割は、他県及び県内で、すでに図書館が設置されている事実を読者たちに示し、それを当然のこととして受け入れさせることにあるだろう。そして、これら短報が繰り返し誌上に現れるさなかに教育会も設置に向けて動き出すことになる。1902年6月開催の郡視学会では「通俗図書館ノ設置ヲ普及セシムル方法如何」という題での議論があった³³。それまで文庫や図書館の設立は郡教育会や個人に任されてきたが、郡視学という地方教育行政官がそれに積極的に関わるようになったのである。

さらに同会直後に開かれた信濃教育会総集会には、長野県出身で文部省学務局長の澤柳政太

郎が招かれた。以下「澤柳学務局長ノ演説」を示す。

日本デハ学校ノ設備ハマヅ整頓シテ居リマスガ、学校外ノモノニ対スル設備ハ未ダ行き届カナイト思ヒマス。普通図書館ヲ造ルコトハ甚ダ重大ノ仕事ト考ヘマスガ、タトエ蔵書ガ数百万冊ナク宏壮ノ建物ガナクトモ小学校内ノ一室ヲ以テ之ニアテ数百万冊マタハ数千冊ノ蔵書ヲ以テ一般ノ人ニ閲覧貸付ヲ許シタナラバ益スルコトハ少ナクアリマスマイ。(中略)長野県ハ普通教育ニ於キテハ他ノ模範トナツテ居リマスルガ通俗的ノ図書館ヲ小学校内ニ設置スルコトナドモ他ノ模範トナツテ貰ヒタイ。(後略)

(「澤柳学務局長ノ演説」『信濃教育会雑誌』1902. 7)³⁴

澤柳は日本の「学校ノ設備」は整っているが「学校外ノモノニ対スル設備」は行き届いていないと指摘する。この「学校外ノモノ」すなわち「一般ノ人」に対応する施設として「数百万冊マタハ数千冊ノ蔵書ヲ以テ、一般ノ人ノ閲覧貸付」する「通俗的ノ図書館」を挙げ、その設立が「甚ダ重大ノ仕事」と訴える。ここでは澤柳が設立者として誰を想定したかに注目したい。彼は教育「模範」県の長野が図書館設立でも「模範」となるべきと述べる。つまり、具体的にはその土地の教育者の自負心に訴えるかたちで図書館設立を促したのである。

さらに翌年、同誌で報告された「第四回全国連合教育会議題事項」には他県教育会の図書館設置動向が紹介されて、施設を未だに設けられない信濃教育会の欠点が可視化されていく。実際、以下の表2に見るように県内にはすでに多くの図書館が存在していた。特に1899年以降それが毎年増加する中で、信濃教育会は図書館を作れずにいたのである³⁵。

表2「長野県の図書館設置状況」

年次	1888	1889	1890	1891	1892	1893	1894	1895	1896	1897	1898	1899	1900	1901	1902	1903	1904	1905	1906
館数	1	0	0	1	0	2	0	0	0	2	0	6	13	10	6	7	3	8	8

「県下図書館開設状況」(『信濃教育会雑誌』1907. 3)を参照し作成³⁶。

4. 知識の収集と図書館構想の進展

以下では図書館設立のための具体的な知識がどう収集されたか、また人々の図書館構想がどう発展したか概観したい。まず1903年に東京で開かれた図書館事項講習会(以下、講習会)に、信濃教育会が会員を派遣したことに注目する。

この講習会は「日本の図書館員養成のはじまり」とされ、日本文庫協会が開催し、博文館が運営する大橋図書館で開かれた³⁷。全国から54名の受講生が集まり、信濃教育会からは信濃図書館創立事務員を務める宮入源之助が参加した。宮入は県内小学校で教鞭をとる教育者だが、1892年には簡易図書館の必要性を説いて更級郡に通俗文庫を作った実績も持つ³⁸。

宮入は講習会で得た情報を「図書館ニ関スル雑録」と題して3回『雑誌』に連載する³⁹。ここには「余ハ本会長ノ命ニヨリ八月一日ヨリ東京市大橋図書館内ニ開カレタル図書館事項講習会ニ出席シ傍ラニ二三ノ図書館ヲ參觀セシ」と、信濃教育会長の命により東京で開かれた講習

会へ参加した事、また数館を訪ねたことが記された⁴⁰。さらに講習内容が「図書館ノ設立維持」や「欧米ニ於ケル図書館ノ状況」など10項目に分けられ報告された。

講習会で得た知識はいずれも信濃図書館設立時に参考にされたと思われるが、図書分類方法もその一つである。これは「図書分類法は主として大橋図書館の定により十門九十四目に分てり」との記述が『雑誌』に見られることからわかる⁴¹。講習会会場である大橋図書館は、講習では「通俗図書館」の代表館として紹介されていた。信濃図書館の蔵書構成は「高尚専門ナル者ヨリ一般卑近ノ者ニ至ル」よう設定されており、「通俗図書館」の代表の大橋図書館は特に参考にしていたと考えられる⁴²。この他に講習会で紹介された参考書の収集も行っていた⁴³。当時、図書館事項講習会への参加は国内最先端の専門知識を獲得することだった。信濃教育会はそれを得るために講習会を活用し、『雑誌』を通じて会員の啓蒙と情報共有を図ったのだ。

県外へと専門知識を得るために出向いた人物がいた一方で、県内にとどまり蔵書を収集する活動に従事した会員もいた。信濃図書館創立係員を務めた保科百助である⁴⁴。彼は信濃教育会総集会で次のような演説を行っている。

数年前より図書館濫設の感あり。余は図書館設立せられたりと聞く毎に果して其効あるかを訝りたり。是が設立要素として図書さえ集むればよしとゆ一わ素人的考なり。実に是を用ゆる即読書家の多き実に第一の要件なり。読者なくんば是より不経済なるわなし。徒に田舎に是を建つるも其効果してあるか。元來是が設立者の主義わ已の名誉を後生に残さんとする為の如し。然れども僅二三万の金を以て名を残さんとするわあまりに野暮なり。余にして此金あらば先是を六分科大学長に託して然るべき書籍を買い是に一頁大の印を捺して教育会に差出して其取計を依頼す。(後略)

(保科百助「図書館の設立につき」(『信濃教育会雑誌』1903. 7))⁴⁵

ここでは2点が重要である。1点目に保科は図書館がすでに「濫設」状態にあることを認めているが、「読書人」のいない田舎にそれを建てることの効果に疑問があるとして、図書館を「読書家の多き」場所に作るべきと主張する。各種学校・官衙がおかれる長野市はこの「読書家の多き」場所に該当し、信濃図書館が長野市に建てられることを正当化する文言と読める。

2点目に保科は2、3万の金で図書館を作って名を残すのではなく、その金を「六分科大学」(帝国大学)の大学長に託して、専門家による専門的図書の購入に委ねよと、その金の使い方を論ず。その上で選ばれた図書に自身の蔵書印を捺して教育会に託すべきとする。つまりこれは理想的な寄贈方法を聴衆に向けて示したものといえる。

このように教育会内で図書館設立の動きが活発化する中で、「図書館設立趣意書」(以下、「趣意書」)が『雑誌』(1903. 10)に掲載される。「趣意書」から図書館設立の目的を見ておく。

社会ノ発達文運ノ進歩ハ教育ノ隆替ニ是レ依ル、而シテ学校ノ設備ハ実ニ之カ表面ノ機関ナリ、然レトモ裏面ニ於テ之ヲ補助スルノ機関ナキトキハ則チ其発達進歩ノ遅々タルハ蓋シ言フ要セス、而シテ図書館ハ即チ裏面ノ補助機関ナリ、学校以外ノ最モ有力ナル教育場ナリ、換言スレハ国民ノ重要ナル自修場ナリ、其必要欠クベカラサル豈多言ヲ要センヤ、

「図書館設立趣意書」(『信濃教育会雑誌』1903.10)⁴⁶

「趣意書」は教育こそが「社会ノ発達文運ノ進歩」を決定するもので、それには「表面ノ機関」である学校と「裏面ノ補助機関」の図書館があると述べる。この図書館こそは「学校以外ノ最も有力ナル教育場」かつ「国民ノ重要ナル自修場」である。では「表面ノ機関」である学校教育は、長野県においてどう認識されていたのか。「趣意書」別箇所では「他府県ニ比スルニ寧ろ優良ノ位置」にあると認識され、「一般教育者ノ読書、研学ノ熱心」もはるかに他県をしのぐと考えられていた。つまり、教育レベルの高さや教員の研究熱心さが自讃されている。

続いて「欧米文明諸邦」と「吾邦」、「吾県」の図書館設置状況が比較される。

(前略)欧米文明諸邦ニ在リテハ大都府ハ云フモ更ナリ、到ルトコロノ小都邑モ図書館ノ設有ラザルハ無ク、其経営組織頗ル宜シキニ適シ、社会各方面ノ人士皆一般ニ其利便ヲ享有シツハアリト、文明ノ発達実ニ其根幹アリト謂ツベシ、翻テ吾邦ノ状ニ察スルニ何ソ其振ハザルノ甚シキヤ、之ヲ最近ノ調査ニ見ルニ、其設有ル者全帝国ヲ通ジテ僅カニ官公立一五私立三五ノ少数ナルノミニシテ、其経営組織モ亦不充分ナル者多シ(中略)吾県ノ如キヲ以テシテ而シテノ見ルベキ図書館ノ設置スラは無シト云フニ至テハ、吾県教育ノ一大欠陥タルヲ免レザラントス、否国民ノ重要ナル自修場タル図書館ノ前途モ亦寂寞ノ感無キ能ハズ、国家ノ為メ長大息ニ堪フベケンヤ(後略)⁴⁷

まず「欧米文明諸邦」では、経営組織が確立された図書館が「小都邑」まで置かれ「文明ノ発達」を支えているのに対して、「吾邦」は図書館が少なく、しかも「経営組織モ亦不充分」であることが指摘される。さらに「吾県」については「見ルベキ図書館」が無く「吾県教育ノ一大欠陥」であると厳しく断じられている。そしてこの状態は「国家ノ為メ長大息」すべき状態として認識されている。つまり長野県に「見ルベキ図書館」がない状況は、教育県の汚名に関わると同時に、国家の「文明ノ発達」にも関わる問題とされるのである。

では図書館にはどのような期待が寄せられていたのか。「趣意書」の上の引用に続く部分から抜き出すと、まず1点目に「県教育ノ大欠陥ト大不経済」を救済することが挙げられる。この「大不経済」とは、図書館がないために読書人たちが個別に書籍を購入するしかない状況を指す。図書館はそうした「大不経済」から読書人を救うというのである。

次に「学者学生ノ研学的飢渴」を充たし「国民読書ノ嗜好」を高めて「社会ノ発展文運ノ進歩」に寄与するという点である。地域の利用者である「学者学生」の「研学的飢渴」を満たすことが、そのまま「国民」の問題にまでスライドしていくことが、ここにも見て取れる。さらに3点目として、人々に「三余ノ師」つまり年の暮れ、日の暮れ、雨の日に読書の楽しみを与えるという意義が挙げられる。そしてそのような図書館は教育先進県としての「吾県」だからこそ必要であり、その設立は「吾信濃教育会ガ率先事ニ任ジ」るべきこととされた。

そしてこの次には、具体的な資金や書籍収集の手段が会員に提示されることになるだろう。

5. 寄付と寄贈

図書館設立のために、どう書籍や資金を集めるか。「趣意書」は読者に対し、書籍購入費や維持費として「一般人士ノ寄付」を待つことを言う。さらに「篤志ノ士」に対して「珍藏ノ典籍ヲ社会ニ供シ」、「公益ニ供スル」こと、つまり書籍寄贈を呼びかけている。以下ではこの寄付と書籍寄贈について、その方法と協力者を明らかにしていきたい。

「趣意書」に記された、想定された図書館設立予算は総額 25,071 円 25 銭である。このうち「最初ノ新購入、継続購入、及維持費」として 20,000 円を「一般人士ノ寄付」によってまかなうとある⁴⁸。これは予算の 79.8%にあたる額であり、書籍購入と運営維持費の大半を寄付でまかなう予定だったことを示している。

5.1 寄付による協力

では実際に寄付金はどのくらい集まり、またどのような人々がそれに応じたのか。『信濃教育会五十年史』によれば、1903 年 12 月時点で寄付金の領収額として 1,137 円が寄せられたが「露国と戦端を開く」ため「寄付金の募集亦自ら中止する」にいたったという⁴⁹。ただしこの数字はあくまで途中経過で、実際にいくら集まったかは別の資料から確認しておくべきだろう。1903 年 11 月以降の『雑誌』には、「広告」と題される寄付者の名前と寄付額が掲載される。これをもとに各「広告」の寄付金総額をまとめたのが表 3 である。

表 3 「寄付金の領収額一覧」

掲載年月	1903.11	1903.12	1904.2	1904.6	1904.9	1904.12	1905.3	1905.5	1905.9	計
領収額(円)	1000	137	441.30	234.99	85.90	84.05	148	10.94	125	2267.18

表から分かる通り「広告」は 1905 年 9 月まで、全 9 回掲載される。終了時の寄付総額は 2,267 円 18 銭で、これは当初の目標額 20,000 円の 11.3%に過ぎず、金銭的な支援の取り付けが結局うまくいかなかったことを示している。なお、信濃図書館の「開館に至るまでの支出金総計」は、建物購入や設備、図書購入費等を合わせて 2,277 円 16 銭 3 厘であり、寄付総額とほぼ同額で開館準備が行われていたことが分かる⁵⁰。

では寄付を行った人物はどのような人だったのか。『信濃教育会五十年史』により高額寄付者 3 名とその寄付額を知ることが出来る⁵¹。一人は長野市に隣接する上水内郡在住の実業家、坂本瀬兵衛で 1,000 円を寄付している⁵²。また佐久郡出身で県会議員を務める並木和一、北佐久郡の実業家小山邦太郎の両名が 100 円を寄付している⁵³。

しかし、この他に誰が寄付に応じて図書館設立を支援したかは不明である。ここでは『雑誌』の「広告」から他の寄付者を明らかにしていきたい。「広告」に掲載された寄付件数は、重複を除くと 86 件あった。これを団体名義 16 件と個人名義 70 件に分け、それぞれ見ていく。まず団体名義には「長野県師範学校職員一同」や「長野県師範学校女子学部学友会」など、職員や学友会によるものが 15 件あった。ここには長野市内の尋常小学校から師範学校まで全学校が含まれる。さらに師範学校卒業後、東京高等師範へ進学した学生たちが連名で行ったものもあった。

上の寄付者は在職校、在学または母校が長野市内の人々だが、それ以外の地域からの寄付

は際立って少ない。すなわち上田中学校の他、上水内郡の小学校と農業補修学校の3校にとどまっていることが分かった。団体名義にはこの他に、県の図書館行政を担当する「県内務部第三課職員一同」が1件確認された。

個人名義の寄付は70件あるが、内26件が県会議員によるものだった⁵⁴。寄付が募集された1903年の県会議員は39名、この64.1%にあたる議員が寄付を行ったことになる。彼らの出身地は県内各地に散らばっている。県会議員に次いで多いのが小学校教員の14名で、その全てが上水内郡の小学校教員であった⁵⁵。県会議員、教員の他に来歴を特定できたのは、先行研究に指摘がある坂本瀬兵右衛門と小山邦太郎の他に、長野県医師会の会長を務める今井政公がいた⁵⁶。来歴が特定できなかった人物は27名である。

以上の検討から、団体の寄付者がほとんど学校だったこと、また個人の場合は県会議員と教員による寄付が多く、さらに議員以外は、ほぼ全てが長野市かその隣の上水内郡在住者に限られていたことが明らかになった⁵⁷。教育会は寄付を呼び掛けたものの、実際には図書館を利用できる近隣地域からの協力を得られたに過ぎなかったのである。

5. 2 寄贈書による協力

では委託・書籍を寄贈したのはどのような人々だったのか。『長野県教育史』には委託・寄贈書の多い上位12名が紹介されている⁵⁸。来歴を補足し表4を作成した。

表4「書籍寄贈者トップ12」

委託・寄贈者名	経歴	冊数
西沢喜太郎	書籍業者・県内外に支店を持つ。	13,045
保科百助	教育者。信濃図書館の寄贈書収集に奔走。	1,735
岩下神太郎	長野県庁事務職員。	930
渡辺敏	教育者。信濃教育会理事・副会長を務める。	602
山本為次郎	不明	566
長野図書館	明治35年長野市内設立の図書館	204
山西孝三	不明	199
中野保	教育者。長野市内にて私塾を経営。	175
小林喜重	不明	163
山口仲之助	不明	141
近山与五郎	不明	110
保科丈五郎	保科百助の兄。	100

紹介された12名の委託・寄贈書の合計は17,970冊である。最も数が多いのは西沢幾太郎の13,045冊である。西沢は長野市に本店を置き、県内外にも複数の支店を持つ「西沢書店」の社長である⁵⁹。この他4節で触れた保科百助や信濃教育会理事を務めた渡辺敏等の教育者、県庁事務員や私塾経営者がいる⁶⁰。では100冊以下の書籍提供者はどの程度いたのか。『雑誌』には1907年5月から3回にわたり「図書寄贈」の欄が設けられるが、その冒頭に次の文章がある。

創立掛員保科百助図書寄贈部の任にあたり左記の通り既に約一万冊の寄贈書を受領せり。尚現時東京各書肆より陸續寄贈中なり。追て寄贈書は本館規則により書目著者、部数、冊数、価格等に至る迄本誌に銘記して感謝の微意を表する筈なれども開館前多忙中につき今回は御寄贈者芳名を挙ぐるに止めたり。

「図書寄贈」（『彙報』『信濃教育会雑誌』1907.5）⁶¹

ここでは保科百助が「図書寄贈部の任」に当たり1万冊もの寄贈書を受け取ったこと、さらに東京各書店から続々と寄贈を受けている最中であることが述べられる。寄贈者へは「感謝の微意」を表すため書名や部数、値段などを『雑誌』に掲載する予定だが、「開館前多忙中」のためにまずは寄贈者名を挙げたと説明する。

「図書寄贈」の欄を見ると、表に掲出した12名以外に少なくとも74名の委託・寄贈者がいたことが分かった。中には598冊を寄贈した峰村喜蔵もいたが、彼の名は先述の上位12名からはなぜか抜け落ちている。また116冊を寄贈した長野市長の松橋久左衛門の名も落ちているのが不思議である。他に主だったところでは赤十字病院長野支部から125冊、県会議員の花岡次郎から76冊、東京実文館から72冊、図書館事項講習会に参加した宮入源之助から70冊が寄せられた。

以上見てきたように、委託・寄贈者の上位12名による17,970冊の他にも、70名を超える寄贈者がいたことが確認できた。冊数にすると20,000冊を超える書籍が集められたことになり、書籍寄贈の呼びかけについては成功を収めたと評価できるだろう。では、なぜこのような好結果を得たのか。次の文章からその手掛かりが得られる。

（稿者注一五無斎こと保科百助は）自己の所有する蔵書一切を挙げて図書館の有たらしめたのみでなく、自ら手車を引いて名家に就いて強請的寄贈図書を漁り歩いた五無斎先生の熱に浮かされたやうな姿を忘れる事はできぬ。各家に就いて寄贈を強要して掠奪にも等しい書巻蒐集の勝手の振舞を演じ得るものは、恐らく先生を描いて他には無かつたろうと思ふ。

窪田茂喜「県営図書館と五無斎先生」（『信濃教育』1929.1）⁶²

保科百助が「図書寄贈部の任」に当たっていたことはすでに見たが、保科が自身の「蔵書一切」を寄贈した上で、自ら車を引いて各家を訪ね「強制的寄贈図書を漁り歩」き、「掠奪にも等しい書巻収集」を行っていたことがわかる。もとよりユーモアを交えた回想だが、こうした個人的なオピニオンリーダーが自身で車を引き家々を回り歩くという行動が、人々に相当数の書籍を寄贈させた一因だったと言えよう。

それでは一方の寄付金は、なぜ予定の11.3%程度しか集まらなかったのか。これについては次の『長野日日新聞』の記事が参考になるだろう。

（稿者注一図書館設立を目論む発起人について）爾後聞く所に依れば、彼の一二の発起人は必ずしも山師詐欺師の類にあらざる由。（中略）則ち彼の会は図書館の創立方法としては、

固より迂遠の愚策なること勿論なれども、山師一輩の徒の所為に類せざることは、是れ余の明確に了する所となれり。

「図書館の事に就いて」（『長野日日新聞』1902. 1. 30）⁶³

これは記者が、図書館設立の発起人を「山師詐欺師」ではないかと疑っていたが、誤解だったという内容である。ここには図書館設立を口実に金を詐取するのではないかという、「図書館」やその設立を持ちかける人物への不信の眼差しが存在する。

実際に信濃図書館開館後に同館を訪れ「県下教育の為寄付」を申し出た人物（上伊那郡）、設立以前に約束した未納分を納めた人物（北安曇郡）などが現れている⁶⁴。つまり彼らは実際に図書館が運営されていることをその目で確認した上で、ようやく支援したのである。この事実からは図書館という施設への理解が未だ進んでいなかったことがうかがわれる。

おわりに

本稿では信濃図書館の設立過程を地域社会との関わりから検討した。『雑誌』を資料にして同館設立の機運がどう醸成されていったか、さらに寄付者と寄贈者の地域や職業その思惑などを考察した。

図書館を設立するという機運の醸成には、県内外の図書館設立ブームを報知する『雑誌』上の短報や中央官僚の演説などが寄与した。またその演説は教育県長野の教育者であるという誇りに訴えかけるものだった。

具体的に図書館を作るに当たっては、信濃教育会は会員を東京に派遣して最先端の知識を収集させた。また教育会総集会で演説して、図書館を長野市に置くべき理由や支援方法を会員たちに示す者もいた。しかし熱烈な推進者がいる一方で、寄付や書籍寄贈を呼びかけられた多くの人々は支援に慎重だった。端的に言えば、本は出すが資金は出さない、というのがその対応であり、資金を出した少数者も図書館を利用できる近在の人々だった。なかには図書館設立者を「山師詐欺師」視した者さえいたのである。

このように信濃図書館設立に関して、教育県の教育者としての矜持に関わるものとして奔走する設立者側の有り様と、それとは対照的に複雑な反応をみせる住民の反応が明らかになった。だが、ウィーガンドがいう「地元の諸条件」の解明を課題としたとき、いまだ以下のような問題が残されている。

まず「地元の諸条件」が信濃図書館の蔵書にどのように現れているのか、具体的な蔵書内容を検討して明らかにする必要がある。次に一般の図書館利用者にとって同館がどのような空間だったかも明らかにする必要がある。さらに信濃図書館設立が信濃教育会や長野師範学校関係者のネットワークの形成や保持にどのような意味を持ったのかという点も重要である。また、寄付金が目標の1割しか集まらなかったことが明らかになったが、このことが図書館運営にどのような影響を及ぼしたのかについても検討する必要がある。『雑誌』及びそれ以外の諸新聞・雑誌の収集と分析をさらに進めて上の課題に取り組みたい。

- ¹ウェイン・A. ウィーガンド著・川崎良孝ほか訳『メインストリートの公立図書館』京都図書館情報学研究会, 2012, p. 206.
- ²国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館, 1987. 「大日本教育会」の項目、上沼八郎執筆。
- ³帝国教育会編集/発行『帝国教育会五十年史』1933, p. 18.
- ⁴梶山雅史編『近代日本教育会史研究』学術出版会, 2007. 梶山雅史「教育会史研究へのいざない」(pp. 19-24)参照。
- ⁵注3に同じ。
- ⁶永末十四雄『日本公共図書館の形成』日本図書館協会, p. 146.
- ⁷石井敦「教育会と図書館(1)」『ひびや8(5)』1966. 2, p. 145(9).
- ⁸裏田武夫・小川剛「明治・大正期公共図書館研究序説」『東京大学教育学部紀要』1965. 9.
- ⁹永末十四雄「日本公共図書館の普及に関する史的考察」『図書館学会年報』1960. 2.
- ¹⁰竹林熊彦「大日本教育会書籍館(一)(二)」『図書館雑誌』1937. 6、1937. 7.
- ¹¹石井敦「教育会と図書館(1)~(5)」『ひびや』1966. 2-1967. 3.
- ¹²奥泉和久「教育会図書館の発展過程に関する一考察」『図書館史研究』1987. 9.
- ¹³和泉田正宏「明治期北海道図書館史序説」『図書館学会年報』1964. 6.
- ¹⁴坂本龍三「札幌区(市)教育会附属札幌図書館—その史的概観—」『図書館史研究』1986. 8.
- ¹⁵稿者は「教育会図書館の社会的意義」(『図書館界』2015. 6)で、現在の滋賀県近江八幡市に設立された八幡文庫(1904-1909)の蔵書と地域との関わりを検討した。
- ¹⁶長野県教育史刊行会編集/発行『長野県教育史 3』1983, p. 768.
- ¹⁷注16に同じ。引用は、p. 771.
- ¹⁸文部省総務局文書課編『文部省年報』文部省, 1909, pp. 584-585. なお『信濃教育会五十年史』(信濃教育会編集/発行, 1935)に「開館当時の蔵書数三万五千冊」(p. 170)とある。『文部省年報』と1万冊以上の差が生じた理由を明らかにすることは今後の課題だが、本稿は『文部省年報』が近代図書館の概要を把握するための重要な基礎資料であることから17,670冊を開館時の蔵書数とする。
- ¹⁹「県下図書館開設状況」(「彙報」『信濃教育会雑誌』1907. 3)による。67件の内訳は個人または複数名による運営が27件、青年会が12件、小学校職員が11件、同窓会が7件、校友会が2件、その他8件である。なお注18の『文部省年報』には信濃図書館の他に塩尻文庫、中野文庫、大里文庫が記されている。これらは全て個人設立の図書館である。信濃教育会の「県下図書館開設状況」と『文部省年報』とは記載された図書館数に差がある。その理由は不明だが本稿の検討の範囲外となるため今後の課題とする。
- ²⁰県立長野図書館編集/発行『県立長野図書館十年史』1939, p. 17.
- ²¹奥泉和久編『近代日本公共図書館年表』日本図書館協会, 2009.
- ²²『文部省年報』(注18に同じ)、p. 584-585. 蔵書数第1位は香川県教育会図書館(38,784冊)、第2位は高知図書館(24,018冊)。
- ²³信濃教育会編集/発行『信濃教育会五十年史』1935.
- ²⁴図書館開始委員長には長野師範学校教諭を務める土屋良遵が、委員には林豊次、宮澤佐源次、帯刀倉三郎、高松良、宮内益次郎、中村美喜之助の6名が任命された。また事務員を金子宗三が、創立係員を保科互助が務めた。ただしその具体的な役割については不明である。
- ²⁵県立長野図書館編集/発行『県立長野図書館十年史』1939. 同じく県立長野図書館が編集、発行した『県立長野図書館三十年史』(1959)、『県立長野図書館五十年史』(1979)がある。
- ²⁶日本図書館協会編集/発行『近代日本図書館の歩み 地方篇』1992.
- ²⁷注16に同じ。
- ²⁸注6に同じ。引用は、pp. 210-211.
- ²⁹注6に同じ。引用は、p. 210. なお本稿では開館時の蔵書を17,670冊とする。注18を参照。
- ³⁰「図書館設置」(「彙報」/1887. 10)、「御慶事奉祝」(「彙報」/1900. 5)、「中野文庫の開始」

(「彙報」/1903.1)。引用は全て『信濃教育会雑誌』。

³¹「上伊那郡部会秋季総集会」(「彙報」『信濃教育会雑誌』1899.12)

³²「図書館設立」(「彙報」/1901.1)、「教育補助費」(「彙報」/1901.3)、「全国の図書館」(「彙報」/1902.5)、「教育視察団」(「雑報」/1900.6)等がある。引用は全て『信濃教育会雑誌』。

³³「郡視学会」(「彙報」『信濃教育会雑誌』1902.7, p.63)

³⁴「澤柳学務局長ノ演説」(「論説」『信濃教育会雑誌』1902.7, p.23)

³⁵信濃教育会は「信濃教育会会員図書縦覧所」を1892年に開設するも1年で閉館している。

³⁶注19に同じ。

³⁷日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編『図書館ハンドブック』日本図書館協会, 2010, p.379.

³⁸高松宮家編集/発行『有栖川宮厚生資金選奨録』1941, pp.54-56.

³⁹「図書館ニ関スル雑録」(「雑報」『信濃教育会雑誌』1903.8)

⁴⁰注39に同じ。引用はp.18.

⁴¹「図書分類」(「彙報」『信濃教育会雑誌』1907.5, p.2)

⁴²「図書館設立趣意書」(『信濃教育会雑誌』1903.10, p.前5)

⁴³「寄贈書冊」(「彙報」『信濃教育会雑誌』1904.10, p.51)には、宮入が講習会参考書として紹介した『図書館管理法』を自ら寄贈していることが記されている。

⁴⁴赤羽篤・有賀義人ほか編『長野県歴史人物大事典』郷土出版社, 1989。「保科百助」の項目、中村一雄執筆。保科は長野師範学校卒業後、県内小学校の教育に従事した。

⁴⁵「図書館の設立につき」(「彙報」『信濃教育会雑誌』1903.7, p.33)

⁴⁶注42に同じ。引用は、p.前3.

⁴⁷注42に同じ。引用は、pp.前3-4.

⁴⁸「図書館設立趣意書」(注42)に示された予算は建築費 5,071 円 25 銭、初年度購入書籍・機器 5,000 円、継続購入書籍・維持費 15,000 円。

⁴⁹注23に同じ。引用は、p.148.

⁵⁰注23に同じ。引用は、p.169.

⁵¹注23に同じ。引用は、p.170.

⁵²高野卯助編集/発行『信州百傑伝1』1906, pp.27-31.

⁵³『長野県歴史人物大事典』(注44)参照。「並木和一」の項目、臼田都雄執筆。「小山邦太郎」の項目、永原秀山執筆。

⁵⁴「長野県会議員名簿」(長野県編『長野県史近代史料編2(1)』長野県史刊行会, 1981, p.27.

⁵⁵「職員録」(「彙報」『信濃教育会雑誌』1903.12)

⁵⁶『長野県歴史人物大事典』(注44)参照。「今井政公」の項目、青木富士弥執筆。

⁵⁷『上水内教育会沿革史』(上水内教育会編集/発行, 1942)に「明治三十六年 信濃図書館創立資金募集に応ず」(p.71)の一文がある。同会が支援を行っていたことが確認できる。

⁵⁸長野県教育史刊行会編集/発行『長野県教育史13』1978, pp999-1000.

⁵⁹設立予定の西澤文庫蔵書を信濃図書館に委嘱。『長野県歴史人物大辞典』(注44)参照。「西澤喜太郎」の項目、伝田哲執筆。

⁶⁰『長野県歴史人物大事典』(注44)「保科百助」「渡辺敏」「中野保」の項目、中村一雄執筆。

⁶¹「図書寄贈」(「彙報」『信濃教育会雑誌』1907.5, p.5)

⁶²窪田茂喜「県営図書館と五無斎先生」(「御沙汰」『信濃教育』1929.1, pp.118-119)

⁶³石井敦監修『図書館 明治編(下)』大空社, 1992.9, p.91.

⁶⁴「図書館へ寄付金予約せられたるは」(「彙報」『信濃教育』1910.1, p.37)、「寄付金整理中に於ける奇特者」(「彙報」『信濃教育』1910.1)。

(生涯教育学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2015年9月1日、改稿2015年11月4日、受理2015年12月24日)

図書館設立過程と地域社会

—信濃図書館を例として—

嶋崎さや香

明治 30 年代以降、全国各地に作られた教育会図書館は、日本の近代図書館発展の過程において重要な位置を占める。これまで教育会図書館に関する研究は、設立主体である教育会がどう図書館を作ったかに焦点を当ててきた。しかし、図書館が地域においてどのような役割を果たしたかを考えるには、作り手だけでなく、それを受け入れた地域住民の動きまで視野にいたれた研究が必要である。ゆえに本稿では、信濃教育会設立の信濃図書館(1907-1929)を検討対象にして、信濃教育会の動向を追うとともに地域住民がどのような仕方に関わったかを考察した。具体的には、図書館を作ろうという気運がどのようなプロセスを経て醸成されたか、また図書館を作るための情報収集の過程、また地域住民が資金の寄付や書籍の寄贈にどの程度応じたのか。さらに図書館を作ることが教育先進県の教員であるという人々の誇りに関わっていたことなどを明らかにした。

Library Establishment Process and Local Communities: Referring to Shinano Library in Nagano

SHIMAZAKI Sayaka

After the 30s in the Meiji period, the educational association libraries established all over the country play an important role in the development of modern library in Japan. The studies related to this educational association library have focused on how the educational association who is taking the initiative had created libraries until now. However, a study will be required, which considers not only about the party who established the library, but also the actions of local residents who accepted them to consider what role the library played in the area. Accordingly, this article considered how local residents have been involved while tracking the trend of Shinano Educational Association with regard to Shinano Library (1907-1929) that was established by Shinano Educational Association. In particular, we considered through which process the tendency to try to establish the library has been created, the process to collect information to establish the library, and how much the local residents would like to contribute to money or book donation. In addition, we clarified that the establishment of library was related to people's pride who were teacher in educationally advanced prefecture.

キーワード：教育会図書館、信濃教育会、信濃図書館、地域

Keywords: Private educational association library, Shinano education association, Shinano library, community